

『水鏡』の外国記事についての一考察

—文化交流による「仮相」の平和世界—

陳 文 瑤

はじめに

『水鏡』には仏教関係の記事が多く含まれ、一種の仏教史の書の役割も果たしていると言われてきた。¹⁾

福田景道氏は、『水鏡』には、『扶桑略記』で重要視される政治的・社会的事件が軽視される場合が多い。」と指摘し、その傍証として、『扶桑略記』に頻出する外交関係記事が、『水鏡』ではほとんど完全に姿を消すことを挙げている。氏が指摘する外交関係記事は、朝鮮三国との交渉や遠征などを指している。また、松本治久氏も白村江の事件を例として、『水鏡』ではこうした緊張した国際情勢にふれていないと述べ、作者の関心はそこにはないと指摘した。一方、これとは逆に井口悦男氏は『水鏡』の持っている「文化的世界観」を指摘し、『水鏡』作者は仏教文化による世界参加の方法を提案したという結論を下した。私は外交の意味合いを政治面だけではなく広く文化面も含むものと解したい。そして、『水鏡』作者が外国関係の出来

事に関心を持たないのではなく、何かの意図から、そういう書き方をしていたと考えたい。本稿ではもう一度『水鏡』作者の対外認識を再検討し、その意味について考えたい。

平田俊春氏をはじめとする多くの先行論²⁾では、『水鏡』と『扶桑略記』を詳細に検討した上に、その密接な関係を指摘している。つまり、『水鏡』が『扶桑略記』を主な素材とし、そのほとんどが『扶桑略記』の記事と重複するという指摘である。確かに『水鏡』の外交関係の記事は『扶桑略記』に比べて遙かに少ないといえるかもしれない。しかしそれは、『水鏡』作者が『扶桑略記』の記事を採用するにあたって、何らかの取捨選択をした故とも考えられるだろう。本稿は『水鏡』と『扶桑略記』の記事内容を全体にわたって比較するのが目的ではないが、『水鏡』を研究する基本のステップとして、『扶桑略記』との比較は避けては通れない道だと思っているので、比較の方法も採り入れて論を進めていきたい。

一 『水鏡』の外国記事

さて、『水鏡』には外国についての記事として、どのようなものがあるのだろうか。次ページの一覧表のように整理してみた。

1、天竺³⁾に関する記事

まず、次ページの一覧表を見てわかるように、『水鏡』における「天竺」についての記述は前半部、特に上巻の最初のところに集中して

『水鏡』の外国記事一覧表

巻数	代数	天皇	国別	事	項
上 巻	7	孝靈	天竺	天竺の祇園精舎が焼けたこと。	
	9	開化	天竺	天竺の祇園精舎が二度目に焼けたこと。	
	10	崇神	天竺	天竺の祇園精舎が壊されたこと。	
	11	垂仁	天竺	天竺の祇園精舎が荒れ果てたこととその再建	
	11	垂仁	天竺	仏法が中国へ渡ったこと。	
	15	神功	新羅 高麗 百済	新羅を征伐したことと新羅・高麗・百済、三国が降伏したこと。	
	15	神功	天竺	天魔が祇園精舎を焼失させたこと。	
	20	允恭	新羅	使いを遣わして、新羅に良医を求め、天皇の気を治したこと。	
	20	允恭	新羅	新羅国、年貢八十艘のこと。	
	31	欽明	百済	百済国から仏教が始めて渡来したこと。	
中 巻	32	敏達	高麗	高麗から烏の羽の書が渡ってきたこと。	
	32	敏達	百済	百済国から経論が渡ってきたこと。	
	32	敏達	新羅	新羅国から釈迦仏が渡ってきたこと。	
	32	敏達	百済	百済国から来た日羅が聖徳太子と会ったこと。	
	32	敏達	百済	百済国から石の弥勒が渡来したこと。	
	35	推古	天竺	沈香が天竺から海に浮かんで伝わってきたこと。	
	35	推古	中国	聖徳太子が小野妹子を唐に遣わして、一卷の法華経を持って帰ってきたこと。	
	35	推古	天竺 中国 百済	仏法子細のこと。	
	36	舒明	中国	玄奘三蔵が天竺に渡ること。	
	39	斉明	百済	鎌足は百済国から来た尼の法明が読んだ維摩経によって病気を治ったこと。	
下 巻	39	斉明	百済	百済国からきた義覚僧のことと般若心経の不思議のこと。	
	43	文武	中国	役行者が伊豆から帰京の後に草座にいて渡唐すること。	
	44	元明	新羅	不比等の大臣が新羅使を謁すること。	
	46	聖武	中国	神亀二年、はじめて震旦から柑子の種を持ってきたこと。	
	46	聖武	中国	七年、吉備の大臣が唐土に留められたこと。	
	50	光仁	中国	阿倍仲麻呂が唐で亡くなったことと、唐で詠んだ歌。	
	51	桓武	中国	伝教大師が入唐したこと。	
	51	桓武	中国	伝教大師が入唐の祈りとして、靈門寺で薬師を造ったこと。	
下 巻	51	桓武	中国	伝教大師が帰朝し、天台の法文を流布したこと。同年に弘法大師が唐へ渡ったこと。	
	52	平城	中国	弘法大師が唐土から帰国し、東寺の仏法を流布すること。	
	52	平城	中国	弘法大師、権者のこと。	
	53	嵯峨	中国	伝教大師が渡唐の願いを遂げようとするために、仏像を造り、写経をしたこと。	
	55	仁明	中国	慈覚大師が唐土に渡ったこと。	
	55	仁明	中国	慈覚大師が唐土から帰国したこと。及び唐土にいた時のこと。	

いる。しかも「祇園精舎」を中心に述べられている。井口悦男氏が指摘したように、天竺は仏教発生の聖地として認識され、「天竺よりはじめて仏法もろこしへつたはりにし」(上巻・十一代・垂仁天皇)、「玄奘三蔵もろこしより天竺へわたりたまふ」(中巻・三六代・舒明天皇)と述べられているように、後に日本まで伝わってくるいわゆる仏法東漸の発信源として、その存在が認識されている。

2、朝鮮半島の国々に関する記事

朝鮮半島の国々について、井口氏は『水鏡』作者が半島の国々に対し、矛盾した心情を持っていると指摘していた。しかしながら、新羅に対してはそうであつても、一概には言えないと思う。朝鮮半島にある諸国については、作者の認識によって、語られる頻度とイメージが違っていると、私は指摘したい。

百済国についての記述は仏教史的位置付けを中心に展開されている。天竺よりもろこしに仏法つたはりて三百年と申しに、百済国に

つたはりて、百年ありてぞ、このくにへわたり給へりし。そのとき太子の御ちからにあらざりせば、もりやが邪見にぞ、このくにの人はしたがひはべらまし。(中巻・三五代・推古天皇)

仏法が天竺から唐へ、また唐から百済へ、そして百済から日本へ伝わってきた時、聖徳太子の力によって広まり定着したと作者は総括して、聖徳太子の功績を評価する条りである。百済国を仏教が中

国から日本へ伝わる中継点として認識している。

新羅に対する記述は比較的バリエーションに富んでいるといえる。まず、上巻の十五代「神功皇后紀」では、神功皇后の新羅征伐が長く語られ、二〇代「允恭天皇紀」では、毎年船八十艘を朝貢していたが、允恭天皇崩御後、急に朝貢する船の数を二艘に減少した上、朝貢期も不定期になったことが語られる。新羅との関係は、決して穏やかではなかったことがうかがわれる。一方、天皇の病気を治療するために新羅に良医を求めに行ったこと(上巻・二〇代・允恭天皇)、新羅から釈迦仏が伝来したこと(中巻・三二代・敏達天皇)などが語られる。このように、新羅は先進の文化を持っている国でありながらも衝突が絶えない国として扱われている。

百済と新羅の二つの国と較べれば、朝鮮半島のもう一つの国、高麗国は、『水鏡』中での影がはなはだ薄い。神功皇后が新羅を征伐したあとに百済と一緒に降伏したこと、高麗からの鳥の羽に書いた書が難解とされ、なにがしの王という人がそれを解いたこと、という二つの条だけである。この鳥の羽の書の話が、高麗が日本より高度の文明を持っていると窺わせる。しかし、高麗に関する話はこれしか止まらなかつた。『日本書紀』巻第十「応神天皇」三十七年(三〇六)春二月一日の条に、阿知使主と都加使主が中国に縫工女を求めため派遣されたが、中国への道が分からなかつたため、高麗の道案内人の助けを得て任務を果たした、という話があつた。この記事から高麗の位置づけが窺える。百済と同じく中国という先進文化へ

の中継点という存在であったが、『水鏡』ではそういう役割が無視されている。

なお、『扶桑略記』の応神天皇七年(二七六)九月に「高麗・百濟・任那。新羅。四箇異域共以朝貢。」、欽明天皇元年(五四〇)八月に「高麗。百濟。新羅。任那。共來貢朝。」とあるように、『扶桑略記』では、朝鮮半島の国々として、「高麗」、「百濟」、「新羅」、「任那」が挙げられている。しかし、『水鏡』では、「任那」は完全に切り捨てられている。任那の歴史を探るために欠かせない史料とされる『日本書紀』にも、七年秋九月、高麗人・百濟人・任那人・新羅人並來朝(卷第十「応神天皇」)と記述し、「任那」を高麗・百濟・新羅と同列に取り扱っている。なぜ『水鏡』作者は「任那」という国の存在を無視したのであろうか。『扶桑略記』の「任那」に関する記事を見てみると、朝貢する記事のほか、戦争に関する記事ばかりである。『日本書紀』でもこうした緊迫した状況を記していた。他の三国との紛争が絶えない任那に対し、日本は介入しながらもその甲斐がなく、任那は欽明二三年(五六二)に滅亡した。更に任那が滅亡した後も、日本は任那の復興を計ろうとしたが、叶わなかった。このためか、『水鏡』は朝鮮半島に新羅、百濟、高麗という三つの国しか認識していない。即ち、任那という国も叙述の中に採り入れたら、紛争などを含む日本の敗北に触れずにはすまされなかつたために、その存在を無視したのだと思われる。

3、中国に関する記事

さて、中国についてはどうであろうか。明らかに歴史上の天皇紀に入ってから部分に記事が集中している。これらの記事には、仏教伝来関連の記事、仏法以外の文物が伝わってきた記事、留学生の吉備真備と阿倍仲麻呂の話が含まれている。中国を学問や仏法などの先進国として認識している。『扶桑略記』と明らかに違うのは、中国から日本に渡ってきた人々のことが切り捨てられていることである。『扶桑略記』では、舒明天皇四年(六三二)十月に「大唐使高表仁等來朝」などのごとく、中国から使いが来たことが記述される。それに対し、『水鏡』には唐に渡った留学生・留学僧のことしか述べない。また『扶桑略記』の孝謙天皇の条には、日本仏教に大きな影響を及ぼした鑑真和尚の来日について詳細に述べていた。しかし、『水鏡』では同じく日本仏教に大きな影響を与えた伝教大師・弘法大師・慈覚大師たちの渡唐が語られるのに、鑑真和尚の来日については全く語らない。交流は一方的のように見える。『水鏡』作者は中国を理想化しているが、中国について抱いている感情は格別である。

『扶桑略記』の記事と合わせてみると、『水鏡』は特に国際情勢の変化について語っていない。例えば、斉明元年(六五五)、唐の高宗は蘇定方らを將として高句麗征討軍を発した。高句麗が百濟と結び新羅攻略を謀ったことで、新羅の武烈王は唐の救援を要請したのである。唐軍は高句麗を征討するために、先ず百濟を討つことにした。一方、日本は百濟の要請を受けて、救援のために外征した。これが

いわゆる白村江の戦で、結果的には失敗であった。このように歴史上で重要かつ有名な戦いにもかかわらず、日本国にとつて不名誉な敗退は、『水鏡』では決して語られることがないのである。『水鏡』の作者は国際的な外交関係に関心を持たなかったというより、そういう不名誉な現実を意図的に語ろうとしなかったと言えよう。

二 作られた時代背景について

『水鏡』の「元明天皇紀」では、藤原不比等が新羅の使に接見したことを述べた後に、

國王大臣も時にしたがひてふるまひたまふべきにこそ。このころならばかたおもぶきに異國の人¹にいちの人のあひ給なき事なりなどぞ、しり申さまし。(中巻・冊四代「元明天皇紀」)

とある。「このころ」は、平清盛が独断で宋と交流を行って、非難のを浴びた頃(嘉応二年(一一七〇)前後)と推定されている^{1,2}。

廿日、丁酉、(中略)法皇令入道太相國之福原山莊給、是宋人來着為觀覽云々、我朝廷喜以來未曾有事也、天魔之所為歎、

『玉葉』嘉応二年(一一七〇)九月二十日条^{1,3}

ここに見る『玉葉』の記事は、そうした非難の声の一つである。

上皇の後白河院が清盛の誘いに応じて福原山莊で宋人と会ったことを、藤原兼実は「天魔之所為」と慨嘆した。当時、威勢をふるった平氏権力を恨む貴族は多くて、兼実もその一人である。そういう立場からこういう感想を漏らすのは、もちろん平氏に対する反感から

発するものであろうが、当時の貴族の閉鎖的外交姿勢が窺える。『水鏡』作者のまなざしは、こうした貴族社会の対外観を否定的に見ていると言えよう。今(作者が生きていた当時)の人々は外国人と会うのがどういふことだと批判しているが、「國王大臣も時にしたがひてふるまひたまふべき」と語るように、国の支配者は慣例規則に拘る必要がなく、時節に応じて適切な対処するべきであると作者は主張する。この点で『水鏡』作者は平家に近い立場に立っていた。

おわりに

外国を触れるときには、政治面や軍事面も語るはずであるが、語れば敗戦などのようなマイナス面にも触れてしまう。外国との接触を勧めようとする『水鏡』作者なので、外国との接触のマイナス面を避けるようにしている。そのため、『水鏡』においては、偏って文化面の外国関係記事が多く語られ、『扶桑略記』にある外国関係記事の内、侵略など戦争に関わるものが意図的に捨象されている。『水鏡』作者は文化を以て国際交流を築こうという提案をそれほどしっかり持っていないと思う。しかし、結果的に戦争などの記事が捨象されることによって、『水鏡』には文化によって築かれる平和世界が表されていたのである。その築かれる平和世界は作者の「理想」というより、作者が作り上げた「仮相」というべきであろう。

〔注〕

(1) 尾上八郎「解題」(『校註日本文学大系』第二二卷、国民図書、大15刊。『歴史物語II』(日本文学研究資料叢書、有精堂、昭48)に再録)、岩佐正「歴史物語」(『日本文学史中世』至文堂、昭30)など。

(2) 福田景道「水鏡」構想論序説—政治史的側面と『大鏡』の継承—(秋田短期大学『論叢』三五号、昭61・11)

(3) 松本治久「水鏡」の主題についての一考察——「争い」の記事を中心として—(『武蔵野女子大学紀要』34号、平11)

(4) 井口悦男「水鏡にみえる外国地名の分布—六国史との数値的比較を中心に—」(『慶應義塾大学言語文化研究所紀要』23号、平3・12)

(5) 平田俊春「水鏡の史的批判」(『史学雑誌』四六編一—号、昭10・11。同著『平安時代の研究』(山一書房、昭18)に収録。さらに訂正されて、「水鏡の成立と扶桑略記」『日本古典の成立の研究』(日本書院、昭34)。「水鏡の批判」『私撰国史の批判的研究』(国書刊行会、昭57)に収録されている。また『歴史物語II』(『有精堂、昭48)にも収録されている。)

(6) 前掲注4井口氏の論文。

(7) 『水鏡』本文の引用は、『水鏡全注釈』(金子大麓・松本治久・松村武夫・加藤歌子注釈(新泉社、平10))により、傍線は私に付した。

(8) 前掲注4井口氏の論文。

(9) 『扶桑略記』本文の引用は、『扶桑略記・帝王編年記』(新訂増補 国史大系12、黒板勝美編(吉川弘文館、昭40))により、傍線は全て私に付した。

(10) この点については、すでに井口氏の論文で指摘されていた。

(11) 『日本書紀』本文の引用は、『日本書紀』(新編日本古典文学全集3、小島憲之・直木孝次郎・西宮一民・蔵中進・毛利正守校注・訳(小学館、平8))により、傍線は私に付した。

(12) 金子大麓氏が「水鏡総論」(『水鏡』(歴史物語講座・第五巻)風間書房、平9)では『水鏡』の成立時期を推定する傍証として挙げていた。

(13) 『玉葉』本文の引用は、『玉葉』(国書刊行会編(名著刊行会、昭46))による。

——チエン・ウエンヤオ、広島大学大学院博士課程後期在学——